

秋田営林局収穫量の変遷

計画課 宮沢 一正

1 はじめに

局内収穫量の変遷については、総量等について若干の資料はあるものの、営林署別や樹種別の収穫の量的質的変遷については、特にこれといった資料はなく、局内各署の過去における収穫の変遷を詳しく知りたければ、事業統計等の資料を詳しく調べるか、ベテラン職員の経験に基づいた話を聞く以外にその様子を伺い知ることは難しいのが現状である。

計画業務においては、森林現況のみでなく、地域ごとの収穫内容の量や質についての歴史とその特性を把握しておくことも重要と考え、事業統計の数値を利用して、その変遷が視覚的にとらえられる資料を作成しました。

ここでは、その一例として、秋田営林局の営林署別収穫総量の推移について事業統計の数値をグラフ化したものを添付します。（ちなみに、針広別、営林署別、期間別、ブナ、天スギ等収穫量のグラフも作成可能。）

なお、今回は時間的な制約もあり、収穫量の変動を作り出した要因に対する詳細な検討調査を行うには至りませんでした。

2 当資料を見る上での留意事項

(1) 戦時中（昭和16～20年度）の署別資料については、当時の事業統計が存在しないため数値が欠落している。

この期間の収穫総量については、針・広・天然スギ別年度別収穫量を取りまとめた資料が局100年史に掲載されていたので利用した。

(2) 営林署は、その存続期間が長く安定していたことから昭和61年度時点に存在した営林署を単位として使用した。

(3) 昭和22～33年までは、統計書の単位が石（内27、28年は千石）であったが、1立方＝3.6石として立方に単位をなおしている。

(4) 針葉樹の薪炭材が区別してあった年度（30年代以前）については、針葉樹の薪は、天然スギの枝が主であったといわれていることから、針葉樹の薪

炭材については、数量から除いてある。

- (5) 立方、石及び棚，以外の単位（積層の単位）については，枝等と判断して，数量に加えていない。
- (6) 分収林の民収分については，数量に加えていない。
- (7) 白沢営林署については，大館営林署と合併した。
- (8) 舟形，古口については，新庄営林署と合併した。
- (9) 山瀬については，早口と合併した。
- (10) 6年度については，鷹巣と早口，合川と上小阿仁，藤里と二ツ井の収穫量を合算してある。
- (11) 営林署管轄面積の変化に対する，数値の調整は行っていない。

3 グラフの見方

添付グラフの見方は次の通り

- (1) グラフの縦軸は，各年度を表します。
- (2) グラフの横軸は，各営林署を表します。
- (3) このグラフは，サーモグラフのように，本来カラーで見るもので，収穫量によって色を付けてあり，グラフの縦軸と横軸の交点の色が，ある年度の，ある営林署の収穫量となります。
- (4) 年度は，すべて昭和となっており，左端が大正14年度で昭和0年，右端が平成6年度で，昭和70年度となっています。

営林署別収穫量の推移

営林署

田 和 輪 田 館 口 巢 内 仁 小 川 里 ツ 代 城 田 田 館 沢 曲 田 沢 荘 島 田 岡 庄 室 町 山 河 形 沢 国
 十 花 扇 大 早 鷹 米 阿 上 合 藤 二 能 五 秋 和 角 田 大 増 湯 本 矢 酒 鶴 新 真 向 村 寒 山 米 小

